

# 外交で得た実務経験が 今の私の授業にパワーを与えている



いのぐち くにこ

1952年千葉県生まれ。上智大学外国語学部卒業後、米國エール大学大学院博士課程修了、政治学博士。1981年上智大学法学部助教授に就任。その後、ハーバード大学で客員研究員を務める。1990年から上智大学法学部教授。行政改革会議委員、地方制度調査会委員などを歴任し、2002年から2004年までジュネーブ軍縮会議日本政府代表部特命全権大使を務める。2003年にはジュネーブ軍縮会議議長や国連第1回小型武器中絶合会議長として活躍。1989年、著書『戦争と平和』（東大出版会）で、女性初の吉野作造賞を受賞。他に『ポスト覇権システムと日本の選択』（筑摩書房）、『戦略的平和思考』（NTT出版）など。

## 高校時代の恩師との出会いが 将来の進路を決定づけた

国際政治学者としての原点は、高校時代の恩師との出会いだ。「文学者として、職業婦人として尊敬していました。その赤星秀子先生（桜蔭高等学校）が戦争でご主人を亡くされていると知り、先生が被った戦争の悲劇の重さが十六歳の私にボディブローのように伝わってきました。このようなすばらしい先生を不幸に追いやった歴史の事実とはどういうものか、知らなければいけないと思ったのです」

当時は国内に国際政治学の専門教育を受けられる大学がなく、アメリカのエール大学に留学。勉強は大変厳しかったが、あきらめようと思ったことは一度もない。帰国すると決めた時、教授に「あなたはアメリカに残れば助教授であるが、日本に帰れば無職である」と言われた。実際、帰国後は研究職のない状態だった。

「当時はインターネットのメールもなく、エール大学の指導教授と郵便で連絡を取り合っていました。だから一番行く所は郵便局という生活が一年間続きました」

した。でも、自分の選択を悔いたことはないんです。職が得られなくても、自分は世界の先端の研究をしていると自負していました」

その後、専門分野は違いますが、社会学者の鶴見和子先生が助手に起用し、半年後、二十九歳で法学部初の女性助教授となった。

## 国連で初めて 小型武器の軍縮会議を実現

その後、学者として国内外で活躍する中で、大きな転機は二度あった。

一つは二〇〇二年四月から二〇〇四年四月、日本政府から任命されて、ジュネーブ軍縮会議で外交実務に携わったことだ。猪口さんが大使としてジュネーブに赴任したのは九・一一テロから半年後のことだ。

「国際関係のあらゆる信頼関係が崩壊して、みんな絶望から這い上がれず、多国間外交にも見通しが立たないという時でした」

だが、学問の世界から入った猪口さんは、そのような雰囲気には飲み込まれない立場にいた。

「会議の大きな目的は核軍縮ですが、

# 猪口邦子 さん

国際政治学者

信頼関係が崩壊している時は、小さな成果を大事にしていこうと考えたんです」

そこで着目したのが、毎年五十万人、毎分一人がその犠牲になっているという小型武器（一人で携帯できる殺傷兵器）の削減だ。着任後すぐに各国に働きかけ、国連初の小型武器の軍縮実施の会議開催へとつなげていく。会議では、大きな権限を持つ議長に全会一致で選ばれた。

「私は、常に被害者の立場からものを見ますが、それは赤星先生との出会いに始まる私の原点でもあります。小型武器の問題は、大国から見れば小さなことかもしれませんが、でも、一番被害が出ている分野なのです。まず、被害者の声を議場に届けなければいけないと考えました」

従来会議は実質的には大同土での調整が中心だったが、猪口さんは議長として、小国、被害国、市民社会の声にも耳を傾けるという姿勢を買った。

小型武器の所有は政治権力に直結していることが多いため、簡単に削減することはできない。そのため、長い間、小型武器の分野で国際的な文書が全会一致で採択されることはなかった。だが猪口さんは、小型武器はテロリストの実行手段にもなっており、世界のどの国でも被害を及ぼす可能性がある。だから多

数決ではなく、どんな小さな国も包含されるプロセスを考えていくべきだ」と主張した。

「みんな心を動かされて『賛成はしなけれど反対はしない』という立場をとって、最終的に今後の小型武器軍縮の具体的なプロセスが全会一致で採択されたのです。国際関係も最後は人間関係で、誠実に相手のこだわりを見いだしていくことが多国籍外交の神髄です。ジュネーブで特定分野の実務をやる上で、これまで学生たちと培ってきた人間力が役立ちました。長年、体系論で勝負してきましたが、今は実務経験が私の授業にパワーを与えていると思います」

### 学者は三十代が勝負と本の執筆に専念

もう一つの転機は、ジュネーブ軍縮大使になる十年以上前にさかのぼる。それは、一九八九年に出版された著書『戦争と平和』を執筆したことだ。

当時は日本の言論界でも忙しくなり始めたころだったが、「今、書かなければいけない。学者は三十代で勝負するのだ」と背中を押したのは、政治学者である夫の猪口孝氏だった。

「日本の社会に何らかの形で役立つことを考えたら、国際政治学の原点であ

る戦争と平和の問題についての体系論を日本語で書き下ろすべきだと。学者として生きる自分を見失わないでほしいと言われたのです」

結局、授業以外は朝七時から夜九時まで図書館にこもり、準備に二年、執筆に一年を費やした。

「一冊の本に込めた情熱とエネルギーは、それは大きなものでした。夫は夏休みに毎日、昼食と一緒に食べるために大学まで来てくれました。夫婦の歴史の中でも忘れられないプロセスです」

この著書は、今でも多くの大学で教科書に採用されている。

「初心に戻り、学者として生きるということを見極めたのが、この本を書いた時です。あのままふわふわしていたら学者として研究に邁進（まいしん）することはできなかったでしょうし、大使の仕事に就くこともなかったと思います。大使のような華々しさはありませんが、私にとつては大きな転機でした」

猪口さんは、本を書き上げた後、子どもを出産した。「研究は数年遅れましたが、それまでに蓄積した力でカバーできるものです。女性は邁進できる時期に二倍生きるぐらいの意欲

があるといい。でも、女性が活躍するために認識すべきことは、女性はどうな立場にあっても全員逆境にあるということです。その認識を共有すれば、お互い温かく励まし合えます。相手が本当に困っている時は、例えば、鶴見和子先生が私に研究者としての道を開いてくれたように、決定的な場面で手を差し伸べてあげることがとても大切なのです」



アナン国連事務総長と(2003年)

永遠のテーマは「戦争と平和」。それは、高校時代の恩師との出会いから始まる。学問体系の構築とともにジュネーブ軍縮大使として小型武器の削減に取り組むなど、学問と実務の両面から、戦争と平和の問題を追求し続ける。